

ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究VI

— 母親・症児の性格態度について —

国際基督教大学	荻原 美文
お茶の水女子大学	品川 玲子
お茶の水女子大学	渡辺 千歳
お茶の水女子大学	藤永 保
公文公教育研究所	佐々木丈夫

A Survey of Child Rearing Styles among Mothers Having Children with Down Syndrome Personal Character and Attitude of the Mothers and the Children

International Christian University	OGIHARA, Mifumi
Ochanomizu University	WATANABE, Chitose
Ochanomizu University	SHINAGAWA, Reiko
Ochanomizu University	FUJINAGA, Tamotsu
Kumon Tohru Institute of Education	SASAKI, Takeo

近年、ダウン症児に対する早期療育が一般化し、読字、書字、算数教育も含めた、さまざまな教育が行われるようになってきている。この研究では、ダウン症児の母親とダウン症児との性格や態度の関連性を調査し、見出された傾向が読字、書字、算数といった能力の発達にどのように影響しているかを調査することを目的とした。学齢に達したダウン症児（年齢6歳～32歳、男子51人、女子53人）をもつ母親に対する質問紙により調査を行った。母親と症児の性格の間に多くの関連性が見出され、母親の多くがダウン症児の早期教育を成功させるために努力している様子のあることがうかがえる結果となった。

【キーワード】学齢期のダウン症児、母親の養育態度、早期療育、母親と症児の性格傾向と態度、質問紙調査

Most of the resent children with Down syndrome are exposed with early therapeutic education and learn various subjects including reading, writing and arithmetic. The purpose of this study is to reveal how are the mothers' and the children's personal character/tendency or attitude related, and what effects such tendency have on development of the child's ability of reading/writing and arithmetic. A questionnaire survey to the mothers who have above school-age

children with Down syndrome (6 years old to 32 years old, 51 boys and 53 girls) was conducted. As the results, many of the children's personal character related with the mother's character, and many of the mothers tend to make their effort to have success in early education of their children with Down syndrome.

【Key Words】 School-age children with Down syndrome, Mothers' child rearing styles, Early therapeutic education, Mothers' and children's personal character/tendency and attitude, Questionnaire survey

問題と目的

ダウン症の子どもを持つ母親に対する一連の研究(品川他 1997, 同 1998, 渡辺他 1999)において, ダウン症児に対しての母親の養育態度のあり方がどのような要因で影響を受け, ダウン症児の早期療育の効果や発達の様相にどのような影響を与えうるものか, 母親に質問紙調査を実施する事により, 調査研究を行ってきた。これらの研究においては, 母親への障害の告知のあり方の重要性が示され, 品川他(1988)においては, 告知のあり方が, 母親の教育観, 育児観に少なからぬ影響を及ぼしているという結果が得られた。藤永他(1995), 吉野他(1998)の研究では, ダウン症児の母親への個別聞き取り調査を実施し, ダウン症児への早期療育の内容など, 症児の生活環境, 発達の様相を含めてケースによる詳細な検討を行っている。これらの研究結果から, ダウン症児への早期療育は発達促進に効果があること, 母親の症児に対する障害の受け止め方, 養育に対する意識が, 症児の教育のあり方に影響を及ぼすことが考えられた。また, これらの研究の面接調査の内容や, 質問紙への自由記述, 渡辺他(1995)の学校外教育の指導者への調査の結果などから, 症児自身の性格特性的な側面も, 療育のあり方や内容, その成果に影響を与える可能性があると考えられた。

このような結果から, ダウン症児に特有な性格傾向や, 症児と接する時間が長く影響の大きい母親の性格態度といった点も考慮に入れて調査を行う必要があると思われるため, 本研究においては, ダウン症児の性格傾向と母親の性格態度を調査することによって, 母親の養育態度や性格傾向と症児の性格傾向との関連, 療育のありかたへの影響について関連性を探ることを目的とした。

方 法

前掲の「ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究」第 報および第 報と同一の対象者(母親)へ対になった質問項目を 5 件式で症児について 33 問, 母親について 16 問実施した(質問項目は表 1 および表 3 参照)。

ダウン症児の性格傾向に関する設問については, 細川ら(1998)の研究において, ダウン症児の「学校に適應する際問題であると考えられる行動」として, 「がんこである」「発音が不明瞭で聞き取ることが難しい」「好きなことは続くが, 気の向かないことは続かない」「動作が遅い」「取りかかりが遅い」「疲れやすい」「自分の思い通りにならないと, 引きこもったりふくれたりする」があがっており, また細川ら(1994)では, 16 歳から 49 歳までのダウン症者 79 人を対象に調査を行い, ダウン症者の特徴

として、ひっこみがちで恥ずかしがりであり、欲求不満の解消がうまくできず、注意を素直に聞かない、過度の注目や賞賛を求める、決まりを無視する、指示や要請、命令に従うことを拒む、決められたことに遅れたりさぼったりする、うそをつくといった行動や、つめかみ、指しゃぶりが比較的多いと報告されていることから、これらの結果をふまえて、ダウン症児の療育のありかたに関与するような、症児の性格傾向をとらえる項目に重点をおいて作成した。その他、近年児童の性格研究において注目を集めつつあるいわゆるビッグ・ファイブについても考慮した。

母親の性格態度に関する項目については、症児の性格形成、しつけや教育のありかたに影響を及ぼすと考えられるような特性を、面接調査や質問紙の自由記述の結果などから抽出し、品川他（1988）での母親の教育観、育児観を問う項目も参考としながら、独自に作成することとした。

質問紙実施方法、調査時期についても前掲第報、第報に同じ。本分析については、症児が学齢に達しているもののみ用いた。n = 104(男子 51 名、女子 53 名)であった。

結 果

1) 症児の性格傾向に関する項目について

各項目について、左の「とてもあてはまる」を 1 点として、順に 2, 3, 4 点、右の「とてもあてはまる」を 5 点と評定して分析した。

当該の 33 項目の因子分析を行った。平均、標準偏差、Varimax 回転後の因子負荷量を表 1 に示す。説明可能な 7 因子、「社会的関連さ(社交性)に関する因子」「自己統制に関する因子」

「行動力に関する因子」「挑戦心に関する因子」「粘着的性質に関する因子」「情緒的安定に関する因子」「身体的側面に関する因子」を抽出した。「社会的関連さ」と「情緒的安定」の両因子は、Eysenck, H.J. やビッグ・ファイブなどの強調する外向性や神経質などの因子と大きく重なるものと考えられる。

33 項目について各項目の平均値を検討したところ、ダウン症児の性格傾向として平均値の低いものでは、「ほめると嬉しがる(M=1.24)」「あいきょうがある(M=1.47)」「思いやりがある(M=1.68)」「絵や字を書くことが好き(M=1.72)」、高いものでは「動作がのろい(M=3.37)」「手先が不器用である(M=3.26)」「難しいことはやりたがらない(M=3.18)」「体力がない(M=3.02)」「頑固なくせが少ない(M=3.00)」傾向であるという結果となった。

33 項目について、男女差のあった項目を調査したところ、表 2 の通りの結果となった。男子は女子に比べると、誉められることをより嬉しがり、より気分が安定しており、より体力があり、より健康で、よりおだやかで、より落ち着いていて、よりあいきょうがある傾向が認められ、女子については男子より絵や字を書くことが好きで、頑固なくせが少ない傾向であるという結果となった。

2) 母親の性格態度に関する項目について

1) と同様の評定方法を用いて分析を行った。

当該の 16 項目の因子分析の結果を、平均、標準偏差、Varimax 回転後の因子負荷量により表 3 に示す。説明可能な 4 因子、「物事へのおおらかな態度に関する因子」「自律的積極的な態度に関する因子」「社会性に関する因子」「完全欲求に関する因子」を抽出した。

表1: ダウン症児の性格傾向についての質問項目因子分析結果

	因子負荷量	平均	SD
因子1 (社会的関連さ(社交性)に関する因子)			
27 子どもと関わるのが好き-子どもと関わるのが嫌い	0.78	1.77	0.99
28 大人と関わるのが好き-大人と関わるのが嫌い	0.71	1.70	0.83
8 おしゃべりが好き-おしゃべりが嫌い	0.66	1.80	1.02
25 にぎやかである-おとなしい	0.65	2.46	1.10
7 いろいろ興味がある-興味を持つことが少ない	0.61	1.52	0.83
32 あいきょうがある-あいきょうがない	0.59	1.47	0.76
33 まねをするのがうまい-まねをするのがへた	0.58	1.75	0.93
14 注目してほしい-注目してほしくない	0.55	1.78	0.90
26 思いやりがある-自分勝手である	0.54	1.68	0.86
因子2 (自己統制に関する因子)			
21 おだやかである-おこりっぽい	0.72	2.05	0.91
17 ルール(規則)に従う-ルールを嫌う	0.72	2.43	1.01
16 我慢強い-我慢できない	0.65	2.46	1.01
22 落ち着いている-落ち着きがない	0.64	2.18	1.02
23 集中力がある-集中力がない	0.57	2.48	1.15
12 注意に素直に従う-注意に従わない	0.55	2.71	1.02
13 記憶力が良い-記憶力が悪い	0.27	2.33	1.06
因子3 (行動力に関する因子)			
2 動作が機敏である-動作がのろい	0.74	3.27	1.21
3 自信がある-自信がない	0.60	2.91	1.56
1 積極的である-引っ込み思案である	0.57	2.59	1.22
24 のんびりしている-せっかちである	-0.49	2.30	0.91
18 手先が器用である-手先が不器用である	0.41	3.26	1.21
因子4 (挑戦心に関する因子)			
30 新しいことをやりたがる-新しいことをやりたがらない	0.72	2.53	1.20
11 難しいことに挑戦する-難しいことはやりたがらない	0.64	3.18	1.30
9 絵や字を書くことが好き-絵や字を書くことが嫌い	0.53	1.72	0.94
29 自分の力でやりたがる-他の人の助けを求める	0.47	2.20	1.12
因子5 (粘着的性質に関する因子)			
6 ほめると嬉しがる-ほめても喜ばない	0.60	1.24	0.69
4 くり返しが好き-くり返しを嫌う	0.60	2.11	1.02
5 がんこである-柔軟である	0.50	1.96	1.07
因子6 (情緒的安定に関する因子)			
15 好き嫌いが激しい-好き嫌いが少ない	0.61	2.99	1.19
10 気分が安定している-気むずかしい	-0.55	2.01	0.93
31 爪かみなどの頑固なくせが多い-頑固なくせが少ない	0.30	3.00	1.36
因子7 (身体的側面に関する因子)			
20 健康である-病気がちである	0.51	1.94	1.04
19 体力がある-体力がない	0.49	3.02	1.13

(累積因子寄与率51.85)

表2: 症児の性格傾向に関する項目の男女差

	M(男)	SD(男)	M(女)	SD(女)	t値
6 ほめると嬉しいが-ほめても喜ばない	1.08	0.27	1.37	0.89	2.23*
9 絵や字をかくことが好き-絵や字をかくことが嫌い	1.92	1.02	1.52	0.80	2.22*
10 気分が安定している-気むずかしい	1.80	0.83	2.22	0.99	2.29*
19 体力がある-体力がない	2.84	1.12	3.35	1.15	2.46*
20 健康である-健康でない	1.69	0.88	2.29	1.19	2.91**
21 おだやかである-おこりっぽい	1.78	0.78	2.27	0.93	2.86**
22 落ち着いている-落ち着きがない	1.86	0.89	2.44	1.02	3.07**
31 爪かみなどの頑固なくせが多い-頑固なくせが少ない	3.27	1.34	2.63	1.25	2.50*
32 あいきょうがある-あいきょうがない	1.30	0.58	1.62	0.87	2.17*

(P<.05-*, P<.01-**)

表3: 母親の性格態度についての質問項目因子分析結果

	因子負荷量	平均	SD
因子1(物事へのおおらかな態度に関する因子)			
1 過去のことにとらわれない-過去のこと気が気になりがち	0.78	2.70	1.08
4 細かいことは気にならない-細かいことが気になってしまう	0.65	2.95	1.13
5 失敗や悲しいことから立ち直りやすい-失敗や悲しいことから立ち直りが遅い	0.53	2.35	1.08
11 子育ては楽しいことが多い-子育ては苦しいことが多い	0.41	2.48	1.10
7 子どもをほめる事が多い-子どもを叱ることが多い	0.31	2.62	1.03
因子2(自律的積極的な態度に関する因子)			
14 楽しいと思えることが多い-楽しいと思えることが少ない	0.67	2.21	0.92
3 いろいろ頑張ってしまう方だ-あまり頑張らない方だ	0.52	2.20	1.02
16 新しいことに積極的な方だ-新しいことに慎重な方だ	0.47	2.53	1.06
15 子供の能力は教育次第で伸びると思う-子供の能力と教育は関連が低いと思う	0.44	1.89	0.89
8 ねばり強い方だ-飽きっぽい方だ	0.42	2.33	1.03
2 物事は結局うまくいくことが多い-なかなかうまくいかないことが多い	0.40	2.53	0.97
12 人の手助けはうけたくない方だ-人に助けてもらいたいと思う方だ	0.24	3.21	0.93
因子3(社会性に関する因子)			
6 社交的なほうだと思う-あまり社交的ではない	0.80	2.64	1.19
13 人の上に立つことが多い-人の上に立つことは少ない	0.59	2.99	1.19
因子4(完全欲求に関する因子)			
9 いろいろ不安なことが多い-不安なことは少ない	0.97	2.82	1.17
10 完璧を目指したいと思う-不完全でもよいと思う	0.36	3.18	1.07

(累積因子寄与率42.54)

表4: 男児の母親と女児の母親の性格態度に関する項目の差

	M(男)	SD(男)	M(女)	SD(女)	t値
1 過去のことにとらわれない-過去のこと気が気になりがち	2.39	1.04	3.00	1.03	2.98**
2 物事は結局うまくいくことが多い-なかなかうまくいかないことが多い	2.31	0.88	2.71	1.02	2.12*
4 細かいことは気にならない-細かいことが気になってしまう	2.59	1.06	3.25	1.13	3.07**
5 失敗や悲しいことから立ち直りやすい-(同)から立ち直りが遅い	1.96	0.89	2.75	1.15	3.88**
6 社交的な方だと思う-社交的な方ではないと思う	2.35	1.11	2.90	1.19	2.41*
11 子育ては楽しいことが多い-子育ては苦しいことが多い	2.24	1.07	2.71	1.14	2.18*
13 人の上に立つことが多い-人の上に立つことは少ない	2.71	1.14	3.30	1.18	2.63**

(P<.05-*, P<.01-**)

16項目について、男児の母親と女児の母親で差のある項目を調査したところ、表4の通りとなった。男児の母親は女児の母親より過去のことにとらわれず、物事は結局上手くいくと考えており、細かいことは気にならず、失敗や悲しいことから立ち直りやすく、社交的で、楽しいと思えることが多く、人の上にたつことが多いという傾向が認められた。

3) 症児の性格傾向の因子と母親の性格態度の因子との関連について

上記1)2)で得られた各因子にもとづく因子得点を算出し、症児と母親との間の各因子の相関を求めた。相関係数が0.20以上(5%水準での有意に相当)となったものは表5のとおりであった。

また、男児と女児に分けて相関を調査したところ表6,7の通りの結果となった。相関係数が

表5: 症児(男女)の性格傾向因子と母親の性格態度因子との相関

症児の性格傾向因子	母親の性格態度因子	相関係数r
社会的関連さに関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.38
自己統制に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.36
粘着的性質に関する因子	社会性に関する因子	0.28
粘着的性質に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.26
粘着的性質に関する因子	完全欲求に関する因子	-0.26
身体的側面に関する因子	社会性に関する因子	0.25
情緒的安定に関する因子	完全欲求に関する因子	-0.22
社会的関連さに関する因子	社会性に関する因子	0.21
行動力に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	-0.21

表6: 症児(男児)の性格傾向因子と母親の性格態度因子との相関

症児の性格傾向因子	母親の性格態度因子	r(男児)
情緒的安定に関する因子	完全欲求に関する因子	-0.41
自己統制に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.38
挑戦心に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.38
粘着的性質に関する因子	物事へのおおらかな態度に関する因子	0.32
自己統制に関する因子	完全欲求に関する因子	0.31
行動力に関する因子	物事へのおおらかな態度に関する因子	0.30
身体的側面に関する因子	社会性に関する因子	0.29

表7: 症児(女児)の性格傾向因子と母親の性格態度因子との相関

症児の性格傾向因子	母親の性格態度因子	r(女児)
社会的関連さに関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.48
自己統制に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.34
粘着的性質に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	0.40
情緒的安定に関する因子	物事へのおおらかな態度に関する因子	-0.39
行動力に関する因子	自律的積極的態度に関する因子	-0.33
粘着的性質に関する因子	完全欲求に関する因子	-0.33

0.28 以上(5%水準での有意に相当)となったものを記載した。

表 5 の結果より症児については、「社会的関連さ」「粘着的性質」が母親の性格態度と多く結びついており、母親については「自律的積極的態度」「社会性」といった因子が症児の性格傾向と多く結びついている。特に症児の「粘着的性質」については、因子のなかに「がんこである」というダウン症児によく見られる問題点とされる傾向を示す項目が含まれてはいるが、母親の「社会性」「自律的積極的態度」の高さ、「完全欲求」の低さといった性質と相関がみられるので、粘り強さといった望ましい性質の傾向も持つ因子であると考えられる。

表 6, 7 の結果からは、男児と女児においては、症児と母親の関連の内容がかなり異なっていることが認められる。女児については、関連のある因子の母親についての因子の多くが「自律的積極的態度」であるのに対し、男児は「完全欲求」「物事へのおおらかな態度」とも関連している。

また、特筆される結果として、表 5 より、母親の「完全欲求」が高い方が症児の「情緒的安定」が高い、母親の「自律的積極的態度」が高い方が症児の「行動力」が低いということがあげられる。表 6, 7 の結果より、これらについて、母親の「完全欲求」と症児の「情緒的安定」の相関については特に男児とその親との間に、母親の「自律的積極的態度」と症児の「行動力」の相関については特に女児とその親との間に有意な相関がみられることがわかる。

4) 早期療育・教育のあり方と母親の性格態度との関連について

報告 の早期療育・教育に関する質問項目のうち、報告 において専門機関で行っている割

合が高いという結果が得られた「子どもの集団に入れる」、「リトミック・・・」「体操やストレッチ」「発音、発声訓練」の 4 種を除いた項目につき、それらの療育・教育の開始時期の平均年齢が学齢以前であることから、毎日 1 時間以上を 6 点、毎日 1 時間未満を 5 点、週 2, 3 回を 4 点、週 1 回を 3 点、月 2~3 回を 2 点、月 1 回以下を 1 点として、これら 12 項目についての合計点を実施している項目数で除したものを算出し、母親の療育への積極的な意識や関与の高さを表す指標とした。この平均得点(平均 5.90, SD 3.36)と母親の性格態度の各項目、各因子得点との相関係数を算出したところ、-0.16 から 0.14 までの相関係数となり、有意な相関は得られなかった。母親の性格や態度によって、早期療育の方法や方針が大きく変化する傾向は認められないといえる。

5) 言語的、数的能力の発達と症児の性格傾向との関連について

第 報の質問項目について、「ことば」の発達に関する質問 15 項目と、「数の理解」に関する質問 26 項目につき、それぞれ「はい」と答えた項目の総数を求め、それらを言葉の発達(男女:平均 10.21, SD 3.78, 男児:平均 8.98, SD 4.09, 女児:平均 11.09, SD 3.20)、数の発達(男女:平均 13.16, SD 6.82, 男児:平均 10.83, SD 6.84, 女児:平均 14.98, SD 6.08)の指標とした。これらと症児、母親の態度に関する質問紙で得られた上記の因子との相関関係を調べた。また、これらについて、男児と女児に分けて同様に相関を求めた。これらの結果は表 8 の通りとなった。

表 8 より、言葉と数の発達の双方に相関が高い症児は「動作がのろい」「好き嫌いが少ない」「ルールに従う」「あいきょうがない」「まねをするのがへた」といった傾向があることが認め

られる。また、言葉の発達のよい症児は「絵や字をかくことが好き」「体力がない」という傾向があり、数の発達のよい症児は「おとなしい」傾向があることがわかる。

これを男児と女児に分けてみると、その傾向には大きな違いがあることが認められる。男児については、言葉と数双方と有意な相関があるものとして「動作がのろい」「ルールに従う」「自分の力でやりたがる」、言葉の能力と関連するものとして「絵や字をかくことが好き」、数の能力と関連するものとして「好き嫌いが少ない」という結果になったのに対し、女児においては、言葉と数の双方に関連するものとして「好き嫌いが少ない」「他の人の助けを求める」「あいきょうがない」「まねをするのがへた」、言葉の能力と関連するものとして「我慢強い」「おだやかである」「落ち着いている」「集中力がある」「のんびりしている」「爪かみなどの頑

固なくせが少ない」、数の能力と関連するものとして「体力がない」「おとなしい」といった性質があることが認められた。特に項目29「自分の力でやりたがる-他の人の助けを求める」の対については、男児と女児とで相関が逆になるという興味深い結果となった。

6) 母親の性格態度と症児の言葉と数の発達との関連について

母親の性格態度と症児の言葉と数の発達のあり方に関連が見られるかについて、相関係数を算出して調査した。結果を表9に示す。

表9より、親全体では数の発達の高い症児の親は「人の手助けは受けたくない方だ」と感じている人が多いことがわかる。男児の親については、言葉と数の双方に「細かいことが気になってしまう」「人の手助けは受けたくない方だ」という傾向および「自律的積極的態度に関する

表8: 症児の性格傾向と言葉・数の発達との相関

	言葉(男女)	数(男女)	言葉(男)	数(男)	言葉(女)	数(女)
2 動作が機敏である-のろい	0.35	0.32	0.35	0.33		
7 いろいろ興味がある-興味を持つことが少ない	0.21					
9 絵や字をかくことが好き-嫌い	-0.28		-0.39			
15 好き嫌いが激しい-少ない	0.25	0.33		0.36	0.36	0.37
16 我慢強い-我慢できない					-0.32	
17 ルール(規則)に従う-嫌う	-0.28	-0.26	-0.30	-0.33	-0.32	
19 体力がある-ない	0.21					0.31
21 おだやかである-おこりっぽい					-0.35	
22 落ち着いている-落ち着きがない					-0.32	
23 集中力がある-集中力がない					-0.39	
24 のんびりしている-せっかちである					-0.29	
25 にぎやかである-おとなしい		0.28				0.33
29 自分の力でやりたがる-他の人の助けを求める			-0.29	-0.28	0.29	0.29
31 爪かみなどの頑固なくせが多い-少ない					0.32	
32 あいきょうがある-ない	0.25	0.27			0.30	0.35
33 まねをするのがうまい-へた	0.31	0.26			0.41	0.29
因子2 自己統制に関する因子					-0.32	
因子3 行動力に関する因子	0.25		0.35	0.30		
因子4 挑戦心に関する因子	-0.26		-0.33	-0.31		
因子6 情緒的安定に関する因子					0.43	0.42
因子7 身体的側面に関する因子	0.29	0.30				0.34

表9: 母親の性格態度と症児の言葉・数の発達との相関

	言葉(男女) 数(男女)	言葉(男) 数(男)	言葉(女) 数(女)
4 細かいことが気にならない-気になってしまう		0.30 0.30	
7 子どもをほめる事が多い-子どもを叱ることが多い			0.29
10 完璧を目指したいと思う-不完全でもよいと思う		-0.28	
12 人の手助けは受けたくない方だ-人に助けてもらいたいと思うほうだ	-0.36	-0.37 -0.49	-0.29
因子2 自律的積極的態度に関する因子		-0.29 -0.38	

因子」に有意な相関がみられた。また数の能力については「完璧をめざしたい」傾向についても有意な相関があった。女兒の親については、数の能力について「子どもを叱ることが多い」「人に助けてもらいたいと思う方だ」という傾向に関連がみられた。

考 察

本調査の結果より、まずダウン症児の性格傾向は男女で差がみられることがうかがえた。男児の方がよりおだやかで落ち着いているなど、数値的にみると女兒に比較して社会的に好ましいとされる傾向であるようすがうかがえたが、これは、社会一般的にそれぞれの性別に期待される性格との差で母親の評定が行われているためとも考えられるため、慎重に扱う必要がある。同様に母親についても、ダウン症男児を持つ母親と女兒を持つ母親で性格態度に差がみられた。これらがサンプルの偏りによるものか、一般的傾向なのかについては、さらに研究を重ねる必要がある。

母親と症児との性格的な点の関連をみると、母親が「自律的積極的」であると、症児も社会的、自己統制力があるなど、好ましい性格となるようすがうかがえる。症児の粘り強さという性質については、母親の「完全欲求」因子と結びついてきたが、母親がある程度神経質に子どもに対応することによって、子どもに獲得されていく性質なのではないかと思われる。この症

児の「粘着的性質」であるが、この調査の結果では、症児の数や言葉の発達とはあまり関連しておらず、粘り強くコツコツ頑張るということが、ダウン症児においては、あまり発達には反映されない可能性もあることがうかがえた。また、特に男児については、母親の「完全欲求」因子が情緒的安定や自己統制力とも結びつき、母親の完全欲求が高いほど症児は情緒的に安定し、自己統制ができていくという結果から、男児の育てにくさといった面が感じられる結果となっている。母親の「自律的積極的」因子には頑張る傾向が、「完全欲求」因子には神経質の傾向が感じられることから、これらが症児の望ましい性格傾向と結びつくことと考え合わせると、男児のみならず全体的にみても、ダウン症児の養育には母親の努力を要し、困難が伴うことがうかがえる。

言葉や数といった知的な発達に好ましい影響をあたえると考えられる症児の性格としては、嗜好の偏向が少ないこと、ルール（規則）に従えることが捉えられた。また男児については、行動的におとなしく、内向的なタイプで、自分の力でやりたがる子どもが比較的言葉と数の発達がよいことがうかがえた。女兒については、情緒的におとなしく、あまり社会的には関心でなく、自己統制のできる、人に頼るような子どもが、比較的言葉と数の発達がよいことが考えられた。逆に、動きが多く、ふざけが多いようなタイプの子どもの言葉や数の発達が低いようすがうかがえた。

母親の性格的傾向によって療育への積極性や関与度の高さは影響されないようであることがわかったが、この点は指標の取り方をさらに検討することなどで調査をすすめる必要があると思われる。母親の性格と症児の言葉と数の発達との相関について、男児では言葉・数とも、女児は数について、母親が「人に助けは受けたくない方だ」と感じている傾向に相関が見られている。このことから、男児の知的発達と女児の数的発達については、人任せでは難しく、かなり親がかりで発達している可能性があることがうかがえる。また、男児は細かいことが気になる、完璧を目指したいと思う親の子どもが発達がよいこと、女児については子どもを叱ることが多い親の子どもが数的な面の発達がよいことが分かった。これらのことより、やはりダウン症児の知的な発達については、親の頑張りが必要なのではないかということが示唆される結果となった。親が努力すればそれなりに子どもの発達も伸びているようすがうかがえる。

本研究の結果から、ダウン症児の発達について、また療育の成果の如何については、親の性格態度が影響するような母子の関係性が重要な意味を持つことがうかがえた。このような結果がダウン症児に特有なものなのか、普通児においても共通する部分があるのかについて、今後さらに調査を行い検討を加えていく必要があるように思われる。

引用文献

藤永 保・渡辺千歳・荻原美文・品川玲子・深尾雅彦・堀 敦・塩川英男. (1995). 早期治療教育がダウン症状改善に寄与する要因の研究. *安田生命社会事業団研究助成論文集*, **31**, No.1, 50-59.

- 細川かおり・菅野 敦・橋本創一・池田由紀江. (1998). ダウン症児の学校における適応行動の特徴. *特殊教育研究施設研究年報*, **75**-82.
- 細川かおり・池田由紀江・菅野 敦・橋本創一. (1994). 青年期・成人期ダウン症者の適応行動の特徴. *第32回日本特殊教育学会発表論文集*, 192-193.
- 品川玲子・渡辺千歳・荻原美文・藤永 保・佐々木丈夫. (1997). ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究 : 研究計画と質問紙調査の単純集計. *発達研究*, **12**, 1-9.
- 品川玲子・渡辺千歳・荻原美文・藤永 保・佐々木丈夫. (1998). ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究 : 事前の知識及び告知のあり方と養育態度. *発達研究*, **13**, 1-10.
- 渡辺千歳・荻原美文・藤永 保. (1995). ダウン症児の知的教育に関する予備的調査 : 学校外教育の指導者に対する質問紙調査. *発達研究*, **11**, 23-34.
- 渡辺千歳・品川玲子・荻原美文・藤永 保・佐々木丈夫. (1999). ダウン症児を持つ母親の養育態度の調査研究 : 1.告知のあり方と養育態度およびサポートの関係 2.自由記述の分析. *発達研究*, **14**, 1-18.
- 吉野展世・辻田 岳・藤永 保・深谷正徳. (1998). ダウン症児における早期療育の効果 : 臨界期効果の検討. *発達研究*, **13**, 11-25.